

# 南紀熊野 ジオパークの魅力

日本ジオパークに認定されている南紀熊野で、ジオパークの重要な役割を知る。

仁坂知事(以下仁坂) ●中田先生は日本ジオパークの認定を行っている「日本ジオパーク委員会」の委員長を昨年から務めておられますが、ご専門は火山学のとこ

成果が認められ東京大学に移り、長年火山の研究をしてきましたが、昨年退職し、防災科学技術研究所の火山研究推進センター長に就任しました。

中田節也(以下中田) ●私は富山県出身で金沢大学と九州大学大学院で、熊野の火成岩とよく似た宮崎県の尾鈴山酸性岩の研究をしていました。そのまま九州大学に助手として就職しましたが、その時に雲仙普賢岳が噴火、その観測と調査に従事し、それに基づいて活動評価をする広報的な役目も務めました。その時の研究

仁坂 ●先生は日本で「ジオパーク活動」が始まった頃から深く関わっているとお聞きしましたが「ジオパーク」の歴史や国内外での現在の状況はいかがでしょうか。  
中田 ●ジオパークを直訳すると「地質公園」となりますが、地質学の見所がある公園という訳ではありません。そこで生活している人たちが、その地質からどのような恩恵を受けているかということ



約900mに渡り、幅約15mの橋脚のように岩塔が直線的に立ち並ぶ「橋杭岩」。国の天然記念物であり、南紀熊野ジオパークを代表するジオサイトのひとつ。約1400万年前の火山活動により地下から上昇したマグマが冷え固まったもの。

学ぶ場所でもあります。例えば地質学的に価値のあるものを、地域の人たちみんなで観光などに活用し、地域の人々が気持ちの上でも財政的にも潤うのが、ジオパークの仕組みです。1990年代のヨーロッパで始まり、2004年からはヨーロッパ以外の国々も加わり「世界ジオパークネットワーク」が設立されました。世界ジオパークが現在のようユネスコの正式プログラムになったのは2015年です。日本では2008年に「日本ジオパーク委員会」が発足、7地域を日本ジオパークに認定し、2009年には3地域の世界ジオパークが誕生しました。現在は44地域の日本ジオパークと9地域の世界ジオパークが日本にあります。

仁坂 ●私は自然や動物、植物などには興味を持っていましたが、地質についてはあまり詳しくありませんでした。しかし周りをよく見渡すと、ここ南紀熊野にはラムサール条約に登録されている美しい海があり、自然も豊かで森も美しい。さらにそうした土地で人々は暮らし、歴史を積み重ね、これが世界遺産にもなっています。それらは全て太古から形成されたこの紀伊半島の大地のおかげで成り立っていることに気付きました。そんな魅力溢れる南紀熊野こそジオパークにふさわしい地域であると活動を始め、「南紀熊野ジオパーク」として2014年に日本ジオパークに認定され、2019

年1月に再認定されました。そして2019年7月には拠点となる「南紀熊野ジオパークセンター」が完成しました。

## 南紀熊野を構成する3つの地質とは

仁坂 ●南紀熊野は異なった3種の大地によって構成されています。ひとつは南紀熊野の土台にもなっている付加体と呼ばれるもので、世界的にも有名な「フェニックス褶曲(すさみ町)」はその代表格です。二つ目はその付加体の上に土砂などが堆積し形成された前弧海盆堆積体で、「千畳敷(白浜町)」などがそれにあたります。三つ目は古座川の一枚岩(古座川町)などを生み出した火成岩体です。実は約1400万年前に紀伊半島南部で大規模な噴火があり、南紀熊野に世界最大級のカルデラができたといわれています。その火山活動でできた「古座川弧状岩脈」の一部が一枚岩であり、弘法大師が作ったという伝説が残る「橋杭岩(串本町)」です。これらは地中で固まった後、地殻変動などで隆起し、固い火成岩体の部分だけが風化や浸食に耐え、長い年月を経て現在のよう姿になったといわれています。

中田 ●この南紀熊野は、地質学的にも日本を代表するような場所です。付加体というのは日本の地質構造を形成する非常



# 知事対談

中田節也 × 仁坂吉伸

日本ジオパーク委員会委員長 和歌山県知事



くというか、調査や教育が行える場所のひとつにしたいと考えています。例えば学者さんなどをお招きし、ディスプレイやシンポジウムなどを行えるようにもなっています。また観光も楽しんでもらえるように力をいれており、JR串本駅からぐくしもと観光周遊バスでジオパークセンターに来館することも可能です。さらに橋杭岩や一枚岩などのジオサイトを見て回りたいという方々には、ジオパークガイドが案内するなど、観光拠点や交通の結節点としての機能も持たせたいと考えています。

中田●館内ではジオについて楽しく分かりやすく展示されていますね。また入った瞬間、使われている木のいい香りがしました。やはり木の国、地元を自慢するというのはジオの観点からも重要です。元々ジオパークは“人が作るものである”というのが基本的な考えですが、地域の人がたくさん参加し、運営する人たちが語り合っ一緒に作り上げて行く、そんな仕組みこそがジオパークなんです。そういう意味ではこちらのセンターは、地域の人も観光客も気軽に立ち寄り交流することができ、非常に優れた場所だと思います。

**中田節也**(なかだ せつや)

1952年富山県生まれ。金沢大学大学院理学研究科修士課程修了。理学博士(九州大学)。九州大学理学部助手、東京大学地震研究所助教授を経て、1999年同研究所教授。2018年定年により退職。現在、東京大学名誉教授及び防災科学技術研究所・火山研究推進センター長、日本ジオパーク委員会委員長。



2019年7月27日にオープンした南紀熊野ジオパークセンター。南紀熊野ジオパークの情報発信や調査研究の拠点となる施設。  
場所/東牟婁郡串本町潮岬2838-3  
電話/0735-67-7100

う人たちがたくさんいることは、和歌山県として自慢してもいいんじゃないかなと思っています。自分たちの地域を知ることが大切で、子供達には自分たちの地域に誇りを持って育ってもらいたいですね。また以前中田先生に講師として来ていただいたジオパークフェスタのようなイベントも、積極的に開催したいと思っています。

中田●本当に素晴らしい。ジオパークはみんなで作り上げて行くという共同作業がないと成り立たないんですね。これは自然災害や少子化、過疎化などこれからの日本の課題に対して、地域がどのような取り組みでいくのかを考える時に不可欠なプロセスです。さまざまなレベルを超えている人たちが対話をしている和歌山は、非常にジオパークが上手く機能している例だと思っています。

仁坂●自然には脅威という面もありますが、長い年月をかけて作り上げられたジオの恵みは、和歌山にとって大変な資産です。我々一人一人がもっと大地の大切さを意識し、南紀熊野ジオパークの魅力を発信していきたいですね。そしてその素晴らしさを県外の方々にも知っていただき、訪れてほしいと思います。本日はお忙しい中、ありがとうございました。

仁坂●地震や津波の観測監視システムは“D’NET”と呼ばれるものですが、その観測情報を用いた津波予測システムを和歌山県と海洋研究開発機構が共同開発し、現在は和歌山県と防災科学技術研究所で運用しています。南海トラフ地震は日本列島の少し手前で海洋プレートが大陸のプレートの下に潜り込み、限界を超

えたところで大地が跳ね上がることで生じ、それに伴い津波が起きます。地震や津波が起る構造自体もジオパークの要素なんですね。長い年月をかけてそのような地質の仕組みが積み重なり、形成されて今の紀伊半島は出来ています。このような歴史ある南紀熊野で、みんなでジオパーク活動を行いながら素晴らしさを認識していければいいと思います。

**ジオパーク活動は、人と人の対話から生まれる**

仁坂●当センターは南紀熊野ジオパークの拠点として作りました。地元の方々はもちろん、県外の方々にも来ていただきたいと思っています。施設内にはいろんな設備があり、特に迫力満点のプロジェクショ

※日本列島は大陸のプレート(ユーラシアプレート、北米プレート)と海洋プレート(太平洋プレート、フィリピン海プレート)の4つが接した位置にあり、南海トラフ地震はユーラシアプレートとフィリピン海プレートが接する区域である「南海トラフ」を震源地とする地震である。

**知事対談**  
中田節也 × 仁坂吉伸

日本ジオパーク委員会委員長 和歌山県知事



見るだけでなくジオを体感できる装置が並ぶ施設内。南紀熊野の成り立ちがわかるプロジェクションマッピングは大迫力。

ンマッピングは必見です。他にも見られて体験することができる設備も揃っており、南紀熊野ジオパークの成り立ちなどがよく理解できます。訪れた方々には見るだけではなく、ここで学んでいただ

